656-9308＝研究室直通＝，電子メール：kashida@ias.tokushima-u.ac.jp）までご連絡頂きたい。実費でのビデオダビングと郵送のサービスを行う予定である。

ボランティア組織化の条件をさぐる（講演の部）

藤　村　正　之

0. はじめに

武蔵大学の藤村です。本日は報告の機会をいただき，ありがとうございました。

徳島大学からお招きをいただいたのですが，私，全国47都道府県のうち行っていないところが5県ございます。その1つが徳島でございまして，全国行脚の地図を塗りつぶす意図も兼ねてお邪魔させていただくことにしました。残りの4県はどこかといいますと，高知と大分，長崎と佐賀ということになります。九州にまとめていかせていただく機会があれば一気に全国制覇達成ということになるかもしれませんが。

今回，シンポジウム全体のテーマが，「地域とボランティアの未来」となっております。私も社会学の世界で勉強してきて，ボランティアに関しての調査研究をしたり，自分自身が1ボランティアとして若干関わった経験があったりいたしますので，それらを整理するような形で，今回のお話をさせていただければと思っています。ただし，当然ボランティアにもさまざまな種類・形態がありますし，NPO活動に広がる問題もあります。また，全体動向にかかわるマクロな議論から，現場のノウハウみたいなお話まで，レベルもいくつかあります。今日は，私の後の3人の方々のお話もありますので，話題提供風に，経験およびアイデアの交流みたいなものができればと思っております。

本日は大きく3点の話題設定を予定しております。第1は，「現代日本のマ

クロな動向」として，現代日本でのボランティアの問題はどう位置づけたらいいのかという話です。第2は，具体的な活動例として，「NPOとしてのあしなが育英会」に関するお話です。私は縁があって各種の遺児への奨学金貸与を中心に活動をしている「あしなが育英会」の調査を2度ほどやらせていただいたことがあります。全国規模の募金活動をして，ある程度の成功を収めている組織ですが，そこでの成功の条件をご紹介することを通して，ボランティアやNPOについて考えるきっかけを得られればと思います。第3は，私自身も1ボランティアとして不定期の関わりを持っているものがあるのですが，そこで感じたりしたこと，またボランティア調査の経験や社会学の内部でのお話，現場で活躍されているみなさんのお話などで，今の時代はこんなことを考える必要があるだろうなあと思いましたことを少し話題として整理いたしました。

ここにお集まりの方は，一般市民の方というよりは，すでにボランティア活動をされているなり，専門的な勉強をされている方が中心かと思われますので，それに合わせつつ，一般市民の方にとっての話題の中から専門的な活動をされている方に参考になることも多々あるかと思いますので，そういう相互関係を意識しながら話をしていければと思います。

それでは，第1のマクロな話題のほうから入っていきたいと思います。

1. 現代日本のマクロな動向

1－1. 社会全体にとって－福祉国家と福祉社会の並立への期待

社会福祉に限らず，ボランティア・NPOに関わる問題というのは，現代日本のさまざまな場面で目にすることが多くなっています。それらの活動が，社会全体そして個人にとって持つ意味についてどんなことがいえるのか，簡単に確認してみたいと思います。まず，社会全体にとってのお話からですが，今日は社会科学の理論上の問題を本格的に展開する場ではありませんので，少しアバウトな話をさせていただきます。

高度成長期を中心として，「福祉国家」が重視された時代があります。今

もその大事さ自体は変わっていないと思いますが，次第にその組織活動が持ってしまう官僚臭さとか，財源問題，さらには時代がもう少し手作りのソフトな方向を求めているといった要因が重なりまして，近年は「福祉社会」という言葉が使われるようになってきました。その意味では，理想モデルに該当するものが福祉国家から，福祉社会や共生社会というものに変化してきております。

共生社会という言葉もわりと使われるようになり，男女共生社会とか環境共生社会とか言われますが，私自身はまだ自分の専門用語として使わないようにしております。というのは，日本語の共に生きるという言葉として「共生」が使われ，その趣旨はわかるのですが，これが漢字2文字の共生になった途端に，生態学のエコロジー的な意味での弱肉強食的な意味も含んでしまう可能性があるからです。たまたま，共生社会を使っている先生にそういう質問をぶつけましたところ，「それは，エコロジーの言葉で使う共生社会と言うより，人間の尊厳を重視する社会という意味だと思えばいいんじゃないですか」というお答えでした。まあ，そうですかという感じでしたが。他の漢字で趣旨が生きる良いのがあればよいのですが。

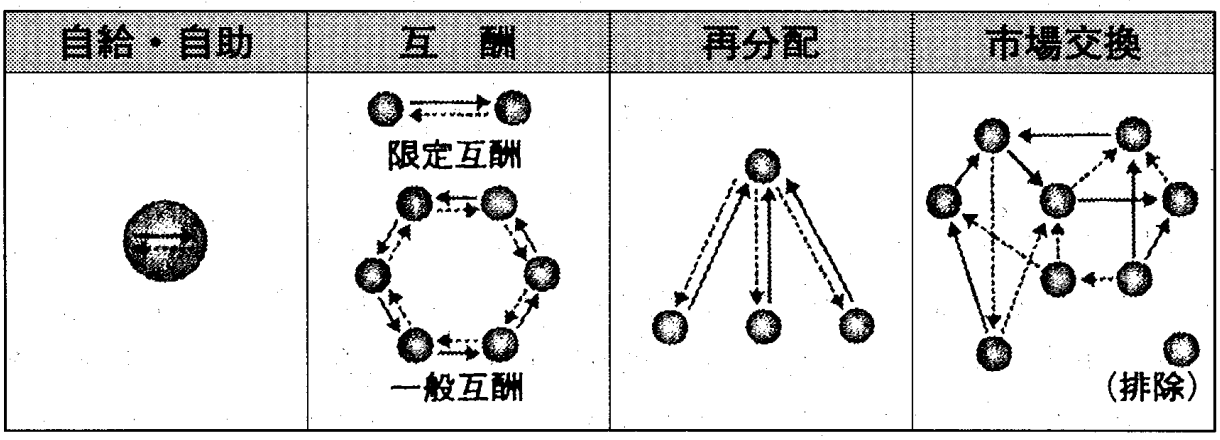
それらの理想モデルの変化の下敷きには，国家中心から各々の市民が担う福祉社会へという流れがあるのですが，それを別の観点でとらえるとどうなるか考えていきましょう。

「経済人類学」という領域にK．ポランニーという研究者がおりますが，彼が整理した分析枠組がいろいろと敷衍されて，「資源配分のパターン」の4形態として使われています。モノ，お金，サービス，情報などがどのように配分されるかに関して，4つぐらいの配分型がある。そして，社会福祉の領域がどのようなパターンと関係しているのかが問題となるわけです。その4つの型は，自助・互酬・再分配・市場交換の4つです（表1，図1)。詳しくふれることはできませんが，各々の特徴を最小限整理してみます。

［表1］　資源配分の現代的形態

配分様式	媒介メディア	親和的行為主体	関係性
自助	愛	家族・個人	親密性
互酬	帯価値	親族・地域	
		友人関係・ＶＡ	共同性
		生協・住民参加型	
再分配	権力	政府	公共性
		(中央政府･地方政府)	
市場交換	貨幣	企業	物象性

図1　資源配分の現代的形態の模式図



「自助」は自分たちの家族の中で行われてるさまざまな生活上の便宜を図ることが該当する。家族もだんだん弱まっているので，最小限の単位は家族でさえなく，個人がその担い手という場合も考えられるかもしれません。

2番目が「互酬」ということで，これはお互いに助け合い連帯するということです。従来であれば，この担い手が親族や地域であったのですが，現在はその力は弱まっている。その結果，友人同士の方が居心地がよかったり，ボランティア的なものの方がよかったり，生協活動があったりという，新しい人間関係が互酬を支えている。また，その互酬性の中には，2者内でのみ

やりとりされる限定互酬もあれば，助け合いがぐるぐる回る一般互酬タイプのものもあります。限定互酬のわかりやすい例として，もらった人に返すバレンタインデーとホワイトデーの関係みたいなものがある一方で，ことわざに言う「情けはひとのためならず」というような一般互酬もあるわけです。お中元のやりとりみたいなものを考えて，相手にあげたそうめんや海苔がぐるっと回って自分に返ってくるような例が，一般互酬としてはわかりやすいかもしれません。

3番目は「再分配」です。これは基本的に政府が行うタイプの配分形態で，昔なら年貢，今なら税金という形になるだろうと思います。権力に基づいて資源をいったん中心に集めておいて，ある考え方に基づいてもう一度配り直していくということになります。

4番目が「市場交換」です。現在なら，企業や私たちが消費者として行っている行動がその中心ということになるでしょう。市場交換はお金を払ってくれれば誰でもいいという人間関係が作られるわけでして，それによる広がりも大きいのですが，逆にお金を払えなければ排除されるという要素もあります。

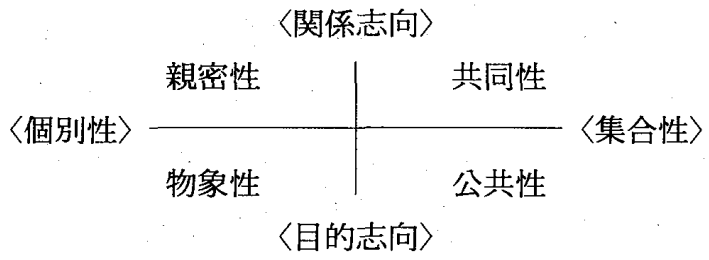
以上の4つのパターンの中で，どれがどれぐらいの比重になっているかを確定することは難しいのですが，現代社会が市場を中心に動いているということは事実ですし，社会福祉や社会保障の問題も，ご存じのように市場の導入が必要なのではないかと言われています。私は一部それは言えるが，他方で一部それは難しいだろうと思っています。

全体の話に戻りますが，これまでの社会福祉・社会保障が税金を使う形の再分配，すなわち政府中心の活動だったとしますと，それ以外の他の3つの配分形態に対する期待が次第に強くなってきている。各々のパターンなりのいい作用・働きがあるのではないかということです。すべての福祉活動から政府が手を引くということがいいとは私も思っていませんし，現実的にもそんなことはありえないでしょう。しかし，必要な部分において他の配分形態の方が有効・機能的だということがあるならば，再分配だけでなく自給・自助，互酬，市場交換も使われていくべきではないかと思います。そのような

多様な配分形態で生活を支えていこうという流れの中にボランティア活動もあり，4つの分類でいえば，お互いに助け合う，すなわち「互酬」という枠にはいることになると思います。

また，他方で，この4つの分配のパターンに対応して，そこで作られる人間関係の質というものがあるのだろうと思っています。「自助」から順番に考えますと，家族や個人での交渉は「親密性」と関係しており，相手が好きだからするということになるでしょう。2番目の「互酬」では「共同性」，お互いに仲間だからしましょうということになるでしょう。3番目の「再分配」は「公共性」。権利だから，もらえたり，やらなければならないということになります。4番目の「市場交換」は，貨幣を媒介させることによって，人間のやりとりが物のように変質してしまうということで，難しい言い方になりますが「物象性」などと言われたりします。そこでは，お金くれるからする，お金くれるからやらないといけないという関係になります。

［図2］　関係性の基本配置



この4つの人間関係がいまどのように動いているのかということが大事になるかと思います。少し前の時代ですと，「共同性」「公共性」が大事ということになるのでしょうが，現代の社会全体の動きは，「親密性」と「物象性」の方向に動きつつあるようです。逆にいえば，「共同性」や「公共性」という関係が作れるのか作れないのかが，現代社会が抱えている問題であり，それを達成していくのはなかなか難しい。だからこそ，課題となる。

この4つを関連づけた図は概念間の関係を整理した程度のものなのですが，私が社会福祉・社会保障にかかわるところで聞いた人間関係の変化の問題を説明・理解できる部分があります。たとえば，介護をめぐるお嫁さんとお姑

さんとの問題は，姑さんからみれば，お嫁さんは親密な関係だと思っているのに対し，一方でお嫁さんから見ればそれはあくまで共同の関係でしかないと理解されているためにうまくいかないということがあります。

ホームヘルパーさんが特定の家庭に行き続けると親密になりすぎるからということで，一部地域ではヘルパーさんがチームを組んでローテーションで回り，なるべく親密な関係にならないようにしているというようなことがありました。これは，行政が派遣する形のヘルパーさんは公共性が求められるはずなのに，親密性の方に向かいかねないことに対しての制度的対応なのだと位置づけられるでしょう。

また，各地で行われている住民参加型サービスにおいて多少お金が介在する場合がある。お金が介在すると，払っている側はお手伝いさん代わりに使ってしまうこともある。そういうのは，ここでいうと，物象的なお金に関わる関係と見ている人と，一方でお手伝いをする側からは自主活動による共同性の関係であると見ている。これら4つの象限を使うと，現実に起こっている関係のあり方をめぐる矛盾や齟齬というものが位置づけられるかと思います。

ちなみに，大学の話をしますと，学生の私語というのが近年やたら多くなっています。私も200人くらいまでならなんとか押さえられるのですが，それ以上は難しい。そうなると，私などは当然学生同士で私語の注意をして欲しいと言う風に思うのですが，学生は学生同士注意をしません。その代わりに，私の方に取り締まってくれと思っている。その時に感じますのは，本来大学の学生同士は仲間だから共同性というのをもっていると我々は思っていますが，学生同士はお互い他人同士と思っていて，大学の空間は公共性の空間になりつつある。だから，公共的空間を取り締まるのは警官がふさわしいわけで，我々教員が警官の役をやらされる，そういう時代になっているようです。学生の私語も私たちがストリート・ライブをやっていると思えば気にならないという考えもありますが，大学においても今見たような社会関係の変化があるという例になるかと思います。

今日の後半の話題でもポイントになってくると思いますが，従来型の地域のまとまり，共同性が大変強い地域共同体と，それに対して，従来の福祉国

家型の公共性が強い中央政府があるとすると，その間にあるはずの存在というのが大事になってきていて，そこにてこ入れが必要だと世の中では考えるようになってきている。ところが，なかなかそれを動かしていくのが難しい。そこらへんの問題は，［地域共同体－ボランティア／NPO－地方政府－中央政府］という各行為主体が位置づけられて，地域共同体の共同性から，中央政府の公共性まで色合いが変化しながら存在している。だから，ボランティア／NPOと地方政府が，共同性と公共性を共に有する行為主体として興味深い存在になっており，他方で，地域共同体も中央政府もうまくいかないところで，中間の両者への期待が高まっているというのが今の状況なのだろうと思っています。

1－2. 個人にとって－人生80年・仕事と遊びの多重設計時代

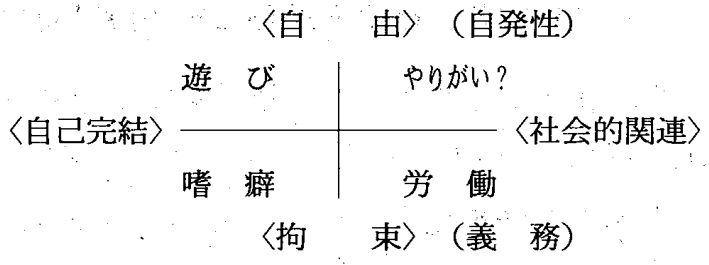
後半の久保田先生の報告もありますが，統計数字で見れば，ボランティア活動やNPOに関わってみたいと言う人はそれなりに存在している時代です。その活動に個人はどんな意味を見出そうとしているかと考えると，人生80年時代になり，仕事と遊びを両方組み合わせていく時代になってきたんだろう。ただし，組み合わせの自由度は高く，パックツアーみたいに決められた人生ではなくて，フリーツアーという感じの自由な人生への志向が強くなっているのかなと思います。

元京都大学の教授で数学者の森毅さんが，人生80年というと長くなりすぎるので，人生20年×4と考えるともう少し生き生きとやれるんじゃないかと言っています。第1期が，大学が終わるまでの時代。それから，会社で中堅ぐらいに入る，あるいは，家庭に入った奥さんですと，ちょうど子育てから手が離れるくらいまでの第2期。第3期が，最後の60歳以上の20年をどう過ごすかにかかわって，社会的な関わり・地域的な関わりを模索する時代。第4期は，人生の晩年をどう過ごすかという課題を果たしていく。人生20年と考えれば，その20年間だけがんばってみるということもできるわけです。

ちなみに，こういう比喩を出しますと人生50年時代から80年時代に変わったということで理解可能なこともあるかと思います。今年も成人式での若者

たちの狼藉ぶりが取り上げられたわけですが，人生80年時代の20歳というのは，比例計算で考えると人生50年時代の13歳ということになりますから，昔の中学生が暴れているということになる。そう考えますと，昨年少年犯罪として話題になった17歳の問題も，同じ比例計算をすれば10歳ということになります。社会的経験の蓄積としては10歳なんだけど，17歳としての体力があるから問題を起こしてしまうということも言えると思います。あまり本格的議論ではないんですが，人生の時間幅と社会的経験の質に見られる平衡関係は社会学的テーマと考えてもいいのかなと思っています。

［図3］　生活行動の分類軸



人生80年時代ですから，労働の時間，遊びの時間というのがあっても，その両方だけでは飽き足らないという感じの時代になっている。そういうところで，この「やりがいのある活動」を求めるという時代が来るんだろう。図3に整理しておきましたが，遊びだけではどうも飽き足らないから，自由なんだけれども，それが社会的関連ももつものを求める。一方で，社会的関連はあるんだけれども，すごく拘束の強い労働ということではなく，少し自由なことをやりたいということで図3の右上に「やりがい？」と書いてある領域の行動が選ばれる。左下の「嗜癖」は，自己完結＆拘束という領域で，なにかアルコールに浸ってしまうとか，テレビゲームに浸ってしまうとかそういう行動の領域です。このような生活行動の分類軸が，個人レベルで意味を持ちうる時代に入ったのかなと思っています。ここまで見てきた，社会全体レベルの位置づけと，個人レベルの位置づけの両方の交わった地点に，ボランティアの問題をどう考えるのかというポイントがあるのだろうと思って

います。

1−3. ボランティアとNPOへの関心

現在，阪神大震災以降，ボランティアやNPOへの関心が高まっています。そして，そこでは，「自発性」の重視と言うことがいわれています。このことについても言い出すときりがないのですが，私が理解していますのは，ものの本によりますと，volunteerという言葉が使われだしたのが，1600年代ぐらい。最初は志願兵の意味で使われたと言うことです。徴兵制がcivil serviceという言葉だとかいわれるようです。このときの志願兵は，軍隊ですから当然衣食住は保障されていた。そのような生活の保障のうえに基礎づけられて，戦争に向けて戦っていくということがあったようです。ボランティアにどこまで有償性が認められるかという問題があるんですが，ボランティアの最初は有償だった，少なくとも衣食住はついていたと考えると，少しはゆるやかに視点を設定できるかと思います。しかも，近年は，そこに「自己発見や楽しみの要素」が求められつつあるということを確認しておきましょう。

個々人がボランティアをやりはじめたとして，活動が高まり，必要があることもわかってくると，次第次第に知り合い同士，近所同士だけではすまなくなってきて，1対1の関係を超えて，2，3人同士の関係に変化していく必要性が強くなってくる。そして，それがさらに拡大して，ボランティアの組織化されたものとしてNPOが大事だと言うことになっていく。組織レベルで相互援助を支える必要性が高まるといえます。つまり，政府（再分配）や企業（市場交換）ではないほうがよい領域／水準がどうもある。また，NPOでいう非営利というのは利益を上げないと言うのではなく，利益をあげるのだが，それを個人に分配するのではなく，NPOに再投資していくという理解が重視されるようになってきている。営利活動をすることで活動資源を増やしていくことも，NPOにとって重要な課題なわけですね。

したがって，現在世の中で行われている自主的な共同性と公共性を担った活動というのは，［個々人のボランティア−（集合化）−ボランティア団体−

（専従の存在）－NPO－（法的認証）－NPO法人－（許認可）－財団］という連続線上の流れを想定でき，そのちょうど中間にボランティア団体みたいなものがある。そこで，専従をおくとNPO，法的認可を受けるとNPO法人になる。このような形で，現代日本においては，ボランティア的なものが，各組織化の段階ごとに，層をなして存在しているのだといえると思います。

2. NPOとしてのあしなが育英会

2－1. 組織の概況

つづきまして，大きな2番目のお話として「NPOとしてのあしなが育英会」についてふれさせていただきます。今日の後半のお話でもいろいろと地域密着型のボランティアという話が出てくると思いますが，それと比較の対象になるものとしてご説明したいと思います。「あしなが育英会」というのは，私が調査等でかかわりました，全国規模の募金活動を展開している団体なのですが，そこから逆に地域活動につながるアイディアが出てくるだろうかということでお話をさせていただこうと思います。

「あしなが育英会」は，広く全国的に活動しているので皆さんもマスコミ等でご存じかと思いますが，1993年にひとり親家庭（災害・病気・震災）の高校生・大学生の進学援助を目的に成立した団体です。「あしながさん」という匿名の寄付者を募って，さらには年に2回街頭でおおがかりな募金活動を行っています。おそらく徳島大学の学生さんも毎年ひとが入れ替わりながら，この街頭に立っての募金活動を手伝っておられることもあるかもしれません。

この団体の事の起こりに，1968年にできた「交通遺児育英会」がある。交通事故で親を亡くした子どもたちへの奨学金制度設立ということで，交通遺児育英会ができたとき，最初は政府の補助金・自動車業界の寄付金というもので賄っていた。しかし，その金額は尻すぼみになってしまい，どうしても一般の方々から資金を募らなくてはいけなくなった。それで，1978年だっ

たと思いますが，一般市民の方々に働きかける制度として，「あしながおじさん」という形の寄付を求めることを決めた。このネーミングはご存じの小説をもとにしたもので，一般の人にもなじみのあるものです。

この背後にある大事なことだと思われますのは，実は一番最初は「教育里親」という名前で募集をかけたのですが，その時にはなんとひとりの応募者もなかった。それでは困ったということで，なじみの深い「あしながおじさん」という名称で募集をかけた途端に，1400人ほどのひとが全国で名乗りをあげるということになった。やる中身が同じでも，人々に訴えかける名称が違うと結果も違う。そういうことが，すごく大事ということがある。寄付されている方々には女性の方も当然参加していらっしゃって，「あしながおじさん」などというかっこいい名前では照れくさいと考えられたのでしょうか，ご本人達が自らのことを「短足おばさん」と呼ぶような話も出てきました。

こんな形で交通遺児育英会は，一般市民に寄付を募っていきます。その中で，今度は交通遺児育英会の中の学生たちが，自分たちは奨学金で助けられたので世の中に対して何かボランティア活動をしていこうということではじめましたのが，献血運動と災害救済・病気遺児救済という活動です。当初は，交通遺児育英会を衣替えして，それらの様々なひとり親（母子・父子）家庭に奨学金を出す団体に変わっていこうということで動き始めていたんですが，やはり，財団法人としての交通遺児育英会の壁というのがありまして，交通遺児以外に奨学金を出せないことが法律上も決まっている。そこで，元々別組織だったわけですから，最終的には独自の道を歩むということで，「あしなが育英会」が別れていくことになった。しかし，これは「あしなが育英会」にとっては結果的にはよかったことだろうと見ております。財団法人の枠にこだわらずに活動をしていこうということになりましたので，自由に活動ができるようになった。2001年春現在も，この組織はNPOに入ることの制約を避けるために，NPO法人にはなっておりません。

次に組織上の問題ですが，どんなことが活動として行われているのかと申しますと，災害遺児6万人，病気遺児26万人，震災遺児500人のうち，高校

生・大学生のいるご家庭に奨学金を出している。あしながさんという形で寄付活動をされている方がどれぐらいいらっしゃるかというと，登録者は約2万8千人，このうち，1年間に実際に寄付を送ってくれた方が，1万2千人ということになります。これもボランティアやNPOの問題を考える際に大事なことだと思うのですが，実は半分の方が参加していない。逆に考えれば，5割の方が参加していればOKということになる。さらにつめれば，5割の方の参加で実際の活動ができるようにしておき，賛助者として関心を持っている方はその倍集めておく必要がある。そうしないと，活動が成り立たない。それぐらいゆるやかな組織で，裾野を広げておくことに意味がある。年間でならせば，月5千7百円ほど，年間で6万8千円の寄付をされている方々が平均値ぐらいになります。しかし，実際には，月5千円以下の寄付の方が45%，1万円までの方が23%，1万円以上の方が32%となります。

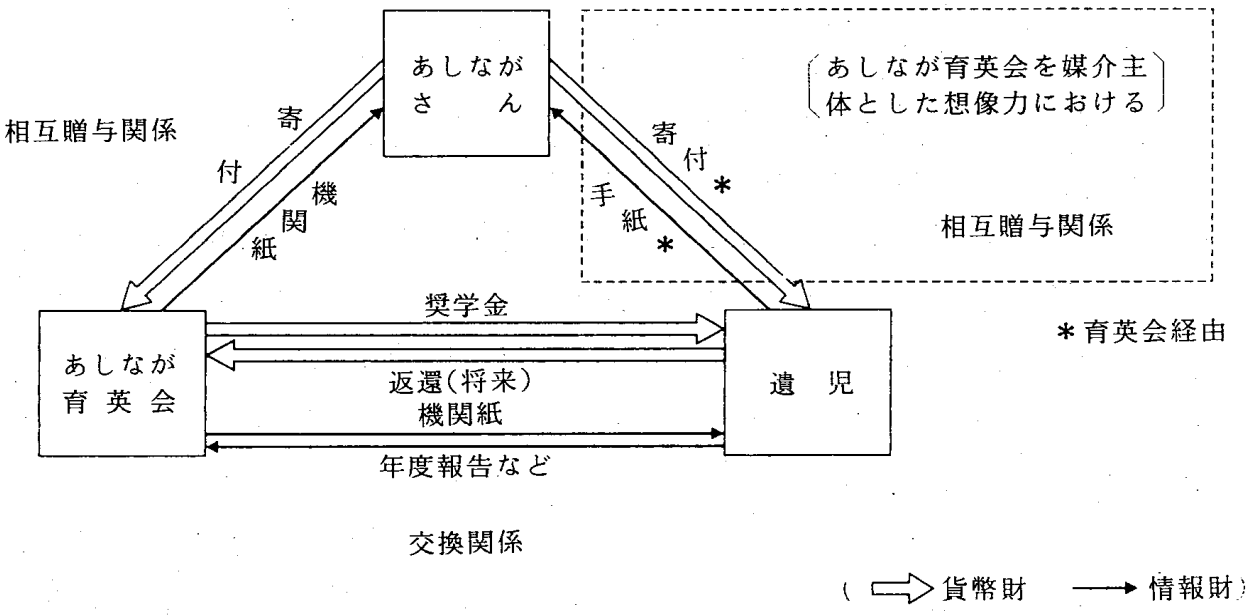


図4 「あしながさん」制度における3つの2者関係

つづいて，関係者のつながりを図示しておきましょう。三角図で書いていますが，まず「あしながさん」から寄付があります。「あしなが育英会」と「遺児」の間では，奨学金貸与とその返還という関係になるんですが，うまく作っていますのは，この遺児たちが「年賀状」やら「暑中見舞い」を書いて，「あしながさん」たちに送ることになっている。基本的にはお互いに名

前も知らない形になっておりますので，実際には遺児たちが書いた年賀状やらを宛名の書いていないままあしなが育英会に送り，あしなが育英会が自分たちの住所録で住所を書き増して，あしながさんたちに送るという段取りになっています。実際に直接寄付をしている相手である高校生・大学生から手紙が来るというのは，寄付をしているあしながさんたちにとって，自分たちのやっていることに関しての実感が持てるということがある。このような直接の関係みたいなものをイメージ上であっても構築しておくことが，ひとつ大事なやり方であるということになるかなと思います。

2－2. あしなが育英会予算

あしなが育英会の「予算」がどうなっているのかということですが，ここに概略の収入・支出表があります。基本的に寄付金と返還収入で成り立っている，これは基本的な募金団体の縮図ということで，返還が次第次第に多くなってくれば組織は安定してくるということになる。

［表2］ あしなが育英会予算（97年度予算）

［収入］		［支出］	
寄付金	18億0000万円(89.5)	奨学金（含む事務費）	13億9394万円(69.3)
運用収入	900万円(0.5)	教育事業費（集い・機関紙）	1億2678万円(6.3)
返還収入	1億9571万円(9.7)	実態調査費	1067万円(0.5)
機関紙購読料	160万円(0.1)	震災関連費	920万円(0.4)
書籍印税収入	334万円(1.7)	募金事務費	7973万円(4.0)
雑収入	126万円(0.1)	一般管理費	2億2331万円(11.1)
		虹の家建設準備費	1億6728万円(8.3)
合計	20億1091万円	合計	20億1091万円

この表で右側の支出の方に注目していただきましょう。奨学金が13億円の支出ということで，会の基本的な活動部分になる。それ以外では，募金事務費に約8千万円ぐらいかかっている。当然ですが，何も活動をしなければ

お金が集まらない。案内の葉書を印刷する，駅頭に立つときののぼりをたてる，募金箱を作る，そういうことの経費が当然かかる。ただでは何もできないということが，ここに現れています。さらには，一般管理費というのがあります。あしなが育英会も決して大きい団体ではありませんが，25人ちょっとの職員の方がやっている。25人の方に日本の勤労者の年間平均収入の600万円を支払うとすると，それで1億5千万円になる。こういう活動をしている人も，霞を食って生きている訳ではありませんから，人件費がかかる訳です。そして，事務所を借りるお金とかもあるので，それらを合計すると支出のうち約2億円を占めているわけです。募金にかかる経費，場所代，人件費を必要経費と考えれば，3億円ぐらいかかる。3億円かけて，20億円集めるという構造になりますから，割り算すると，100円使って，700円集めるというのが感じになるわけですね。募金活動をするときにも経費はかかるということを理解していただきたいと思います。

この組織が抱えている問題をひとつあげれば，広告活動を行った方がもっと寄付者が集まるのではないかということがある。別団体であり，途上国の子どもたちに奨学金を送っているうフォスタープランというのは新聞広告を出して，一気に寄付をつのるということがあるんですが，当然広告経費がかかっている。この広告経費に寄付金の一部を使用するということが，あしながさんにとって納得できることかどうかということがありまして，あしなが育英会としてはそこに踏み切れない。むしろ，母子家庭や父子家庭の皆さんがどういう問題を抱えているかを生活実態調査などを通じて社会的にアピールし，それをマスコミに取り上げていただくことで現実的な広報効果を図るということをやっているわけです。実際に寄付をしていただく方の支持や納得をえられる使途や方法が求められるということになります。

2－3.「あしながさん」寄付者のヒアリングから

それでは，その「あしながさん」という形で寄付をしているのはどんな方なのか。調査では，何人かの方からお話を聞かせていただきました。ここにあげたのは，S市のAさんという方です。時間も迫っておりますが，まとめ

ました記録を読み上げさせて頂きます。

「あしながさんの記録」－Aさん

あしながさんに参加したのは88年に災害遺児のキャンペーンが行われていたときからです。K駅の前だったと思うけど，大学生の人が募金と同時に，「あしながさんになってくれませんか」という葉書を配っていて，それをもらって，これはそういう導きだと思って，それで即はいることにしました。

あしながさんのことを最初に知ったのは，交通遺児育英会の時の頃で，その後途中で災害遺児への奨学金もはじめたというのを，ニュースか何かで聞いて知っていて，一応知識はあったんですね。機会があったらやろうと思っていたんですけど，不思議とそう思っているときって，そういうきっかけにぶつかるもんなんです。交通遺児だけの時は特にやってなかったです。入ったときも，災害遺児だからという意識は別になくて，災害でも，病気でも，事故でも，皆同じだと思っているんで。寄付という形が自分でやりやすいというのもあったし。

やろうとしていた気持を支えていたのは，まあ人生観，価値観，みたいなものですかね。これからの時代は前の時代と違って，地球上のあらゆる人が，宇宙まで含めてもいいんですけど，それが全部，幸福にならないと個人の幸福はあり得ないというのが僕の基本的な考え方なんです。そういう価値観を広めるためには，そういう運動に個々の人がどんどん参加して経験してみないとわからない。あしながさんの月報の記事でも，こちらがやっているけど逆にそれによって力を与えてもらうという意見が圧倒的に多いでしょう。してあげるんじゃなくて，させてもらっている。僕は特に宗教に入っているわけではないけど，宗教の基本的な考え方がみなそうですよね。させていただく，生かしてもらっている，そういう考え方です。いろいろな結果が皆ぐるっと回って全部自分に戻ってくる，人間とはそういうものだという価値観ですよね。1人が幸福でもう1人が不幸のままでいいという幸福観というのは，これからの21世紀はありえないと思っている。求める方向性がそれとはもう違うところにきている。だけど，どんなに豊かになっても心だけはどんど

ん貧しくなって，殺伐とした世界になってきてますよね。

遺児からの手紙とか暑中見舞いは，来るとうれしいです。結構励ましになりますよ。『あしながファミリー』の新聞は隅から隅まで，ほとんど全部読んでますね。昔から全部ファイルして取ってありますよ。2年で1冊になるから，今6冊目かな。滅多にないけど，時に見直すこともありますね。あのときこういう出来事があったかなって。僕は仕事柄ファイルするというのが習慣みたいなものだから，その延長線上ですかねぇ。あしなが育英会への送金は銀行引き落としです。3，4年前に通知がきて，銀行からも可能となったので，すぐ変更しました。まえは郵便局に1回ごと行っていたんですが，あれめんどくさいですね。月1回の振り込み時期はだいたい決まっていたけど，振り込んでいた日はバラバラ。あのころはまだサラリーマンだったから，月末が多かったかな。月末行くと混むから，月初めにいったこともありますね。引き落としになって全然楽ですよね。郵便振替の時は通信欄，俺も最初書いてたけど，途中から書かなくなったな。誰に向けてということはなかったけど，育英会宛というよりは子どもたちに向けてだったでしょう。

メインバンクから自動的に引き落とされるので，特にこの部分のお金を当てているというのはないです。確かに引き落としだと，どうしても存在感がだんだん希薄になっていくでしょうね。年輩の人は，やっぱり何かつながりが欲しいんだろうなぁ。このあしながさんに，最初はいったときに1番目を開かされてショックを受けたのは，やってる人が皆裕福な人じゃないことです。切り詰め，切り詰めで，出している人が多いのにすごくびっくりしたんです。年金暮らしの人が切り詰めるなんて。そういう形で，思いいれ強くやるから，よけいそういう1回ごとのつながりが欲しくなるんじゃないですかねぇ。たぶん1回ごとなら，家でトラブルとかあって出さないときは，「ごめんなさい」できるけど，銀行振り込みだと，「金ねえな，やばいなぁ，でも期日がきちゃった」，みたいな心配があるからね。自分もちょっと休もうかなとかと思うときありますよ。月に2万5千円で，年間30万円払っているとね。じつは，今なんかも本当はそうなんだけどね。今，家計の銀行引き落としの総額が諸経費がらみで20何万円にもなるんで，大変なんですよ。も

う泣いちゃいますよ。

じつは，東南アジアの子供たちを支援する，フォスター・プランも災害遺児と同じ時期からやっているんですよ。あちらは，新聞に定期的に全面広告ででっかくドーンって出るじゃないですか。自分でできる範囲内でということで，月5千円を送っています。フォスター・プランでは本人からの写真や手紙が年に2回ぐらい，会報は年に3，4回きますよ。写真は向こうのソーシャル・ワーカーかボランティア・グループの人が撮ったもので，手紙の方は英語に翻訳して送ってきます。文章っていっても，たわいのない文章ですけどね。就学直前の4，5歳の時から送金しているから，子どもはどんどんどんどん大きくなりますよ。あの制度は，学校卒業で自立したら打ち切りで，援助をしている子はもう13，14歳だから，後2，3年で打ちきりかな。個別の1対1関係で，あしながさんのような不特定多数の支援ではないから，1回終わったときにまた継続するかどうかですね。

今は，いろいろな募金団体がありすぎて，困っちゃうこともありますね。「またきたか，どこで名前調べたんだ？　そんな金ねえよ，俺は」って感じの時もありますよ。ユニセフもすぐ寄付来るけど，結構僕協力しているんですよ。使っている財布はユニセフ，葉書は年に2，3回買うし。この何円でワクチンが買えますとか，井戸が掘れますとかって言われるから。グリーンピースも一時賛助会員になっていたし，ダルニ奨学金もあるなぁ。わかっているけど，そう全部もできない。でも，その中でも，あしながさんの2万5千円が基準というのはかなり高い方だと思いますよ。日本の生活水準でやるから仕方がないけどね。東南アジアなら月1万円ですごい暮らしができるわけだから，1桁以上違いますよね。まあ，飲み代減らして送ればいいんだから。でも，なかなか減らせないんだよね。

以上のお話をお伝えしながら，いろいろ考えられることを整理しますと以下のようになります。まず，このAさんの例をみますと，あきらかに「理念共鳴型」の参加者タイプというものに分類できるだろうということが1点目です。あしなが育英会の調査全体からいいますと，「助け合い循環型」（例：

昔自分が奨学生で奨学金のお世話になったから),「理念共鳴型」(例：Aさんの場合),「活動エンジョイ型」(例：ウオーキング・ラリー等に参加）の3タイプにわけることが可能なようです。第2に，この方の場合「多重寄付者」,「多重債務者」ではなくて「多重寄付者」の傾向があるということです。関心をもった活動にすっと接近していく。彼は「銀行引き落としタイプ」でもありますから，ここからは「習慣性」というものが，こういう寄付活動では重要になるということが言えると思います。第3に，遺児からの手紙や育英会からの会報が来るということで，情報が届けられる，それによってもう一度自分の動機を確認できたり，いまの問題状況について学習ができたりするということがあると思います。

2−4.「あしながさん」の制度的特徴

「あしながさん」の制度的特徴は何かということをまとめておきましょう。

「どこかの誰かが遺児の誰かに」ということで，相互に匿名的な名前の知らない状況が作られています。この点，関係はあるんだけれども，その関係が比較的緩やかですむという形になっている。これはおそらく「寄付」型のボランティア活動がもっている利点だと思います。直接のサービス提供型のボランティアになると，顔が見えるということで，関係の重さが出てくる。それに対し,「あしながさん」の場合は関係をつくりながら軽やかにやれるというスタイルになっています。また，暑中見舞いや年賀状，会報の送付という形での情報提供というのは，寄付をする方の動機を再認する機会になる。そして，なにより，資金を集めたりするときに，当人にとってどういう意味があるかということはすごく大事になるということが言えると思います。ネーミングとかイメージというものも大事な動員力の要素だということです。

3. ボランティア・NPOの課題と地域で考えるべきこと

3−1. ボランティア・NPOの組織構成の重要性

ここまで,「あしなが育英会」から学べることは何かというお話をしてき

ました。それを踏まえて，少しボランティア活動一般，あるいは地域の活動に応用していくときにどんなことが考えられるかを見ておこうと思います。

ひとつは，ボランティア・NPOの組織の構成についてです。私は「心がけ論」があまり好きではありません。「心がけが足りないから，活動がうまくいかない」式の議論にならないようにしたい。今日ここにお集まりの方々は，ボランティアに関心を持たれている比較的しっかりした方々でいらっしゃると思うわけですが，ただでさえ活動をしている皆さんに「もっと心がけよう」と言うと，「もっと絞られるのか」という感じになってしまう。心掛けももちろん大事な要素だけど，それより大事なのは活動しやすい条件がどう作られるかということにあると思います。そういう仕組み作りができればうまくいくこともあるのではないか。その意味で，今日のシンポジウムでも，お互いの経験を披露しあうことで，仕組み作りの参考になることがあるのではないかと考えています。

ボランティアを大きな組織で運営していくということになると，有給のスタッフが必要になります。今回参加の皆さんがたにも，ボランティア・コーディネーターという形で働いている方がいらっしゃると思いますが，ボランティアの研修や確保ということに関心を持たれていると思います。そのときに，さきほど出たように，回転率50％で回せるぐらい人を集められるかどうかということは，実質的にそこの活動がポシャらないためには大事なことのように思います。

もうひとつは，ボランティア動員への工夫というのが必要なわけですが，そこに「初参加の壁」というのがある。ボランティアに関心がない方もいますが，関心があるんだけどもきっかけがない方というのも当然います。さきほどの「あしながさん」のAさんもたまたま駅頭でパンフレットを見かけたからというようなきっかけが後押しになった。関心がある方をうまくつかむということが大事なんだろうと思います。

社会学の他の調査によりますと，比較的，老人の領域の問題ですと地域の女性の方が関心を持ちやすい。自らの老後を考えてということかも知れません。これに対して，障害者の問題などには若者が関心を持ちやすいという傾

向が知られています。逆に，若者は地域に関心を持ちにくいということもあるかと思います。そうすると，それぞれの方の年齢やら属性・状況に応じて，どんな領域のサービスの問題に関心を持ちやすいかということが大事な条件として出てくると思います。

階層との関係でいえば，元・九州大学（現・久留米大学）教授の鈴木広先生が，「ボランティアのKパターン」ということをいっています。比較的豊かな層と，比較的貧しい層とにおいて，助け合いということで参加が活発であると言っておられます。調査によっては，もう少し中流階層のところで活動が活発だという場合もありますが。時間や経費のコストというのも，この「初参加の壁」と関係しています。

日本のボランティアでは「動機重視」という傾向が強い。「ボランティアは心がけが大事」ということになっていて，それは別に悪いということではないんですけれど，そういう「心掛け」の純粋な人は放っておいてもしてくれるわけで，もう少し不純な動機の人を集めるということも考えていいのではないか。どうしてかというと，動機の純粋な人だけを選抜してやってもらうというのは，広がるはずの参加者の裾野を狭くしているわけですよね。もう少し不純な動機の人をたくさん集めて，回転率50％にするということが必要なのではないかと思います。「これをすると，ワープロの技術が身に付きます」とか，「就職に役立ちます」とかいう勧め方もあると思います。その意味では，アメリカのボランティアでは，結果重視で，結果がだめだったら評価されないということも聞いています。むしろ，ボランティア活動を通して自分が変化していくみたいな形で，ちょっとでも関心がある人にかかわってもらっていくというのが大事かなと思います。

時間も迫っていますが，大事な問題が残っています。リピーターの問題です。私自身もボランティアに参加したりした時感じることなんですが，リピーターになるかどうかというのがボランティアにとってある境目をなしている。世の中にはボランティア活動をやってみたいという人はある程度いますが，1回やってしまって，その経験がきわめて苦いものであると，2度とやらない。これは全くやらない人よりも，全否定的に2度とやらない。そうします

と，リピーターになってもらえるかどうかが，大変重要な課題であると見ております。おそらく1回目がなんとなくうまくいけて，2回目もやってみるかなくらいになるならば，かなり可能性が拡がり，3回目はもうその方はボランティアを習慣としてやっていただけるようになっていると思います。自分でも，習慣になり，ノウハウがいろいろ身に付いてくれば，活動が苦にならない。初回の経験がご当人にとってつらくないなり，ある種の楽しみになるなりするということが大事だと思います。

それから，初回の経験につぎ，大事なのは再動員のルートということで，2回目の動員に1回目と同じルートで声をかけるのかどうかということが問題になります。ボランティアに参加してもらう時に声をかけるのは私も苦手ですし，不安だったりするわけです。そうすると再動員ルートをどう確保するのかというのは大変デリケートな問題で，動員のルートを失敗すると，その方はやっぱり参加に対してNOと言ってしまう。そうすると，3回目に誘われたときも，ちょっとやろうかなという気はあるんだけど，2回目に行かなかったからやっぱりNOといってしまうみたいなこともありうるのではないかということです。

ある社会福祉施設のボランティアで，私から学生に声をかけて何人か来てもらうことがあるのですが，次からは，その施設から直接声がかかる。その時，学生たちは心の準備なく，突然参加情報が舞い込むので，行こうかどうか迷ってしまって，迷ってしまうんだったら，NOと言っちゃうという方向にいってしまう。だからといって，私が2度目の声をかければいいかというと，私も教員という立場ですので，2回目の声をかけると彼らに対して権力行為を発動するという感じがする。1回目だと，「まあ，経験だからやってみたら」といえるんですが。この再動員ルートの問題も大事なことだと思います。

それから，ボランティアに集まった人同士が仲間になるかということが，また行く気になるかですごく大事なことです。私も多少関わっているところでは，そこで初めて知り合ったボランティアの仲間がいる。その方とは，年に1回会うわけですが，その年に1回会うのが，楽しみになったりする。不

思議なボランティア同輩意識みたいなものがあります。そこをうまく作れれば，このボランティア・コーディネーター経由とは別枠の人間関係によるネットワークの絆があるということがある。当事者ではないし，また組織の内部の人でもない，でも同じ立場のボランティアの仲間ができるかということはすごく大事なことだと思います。住民参加型団体などで，男性同士で参加していて作業が終わったら，男性同士その後飲みに行くのが楽しみでみたいなことがある。そんな形の，ボランティア同士の仲間づくりがうまくできればそれもまたネットワークの絆になっていくということになると思います。

午前中，佐伯さんたちとの打ち合わせの席でこの話をしていて，じつは，この話はボランティア・コーディネーターの方にもいえるんじゃないかということがだんだんわかってきました。ボランティア・コーディネーター皆さん自身が，コーディネーター同士の仲間づくりができて，ひとまず最初に痛い経験をしないようにして，いちおうの結果がでれば，気持ちが続く。そうなると，コーディネーターの皆さん自身が自分たちを支える応援団を作っていけるかどうかですね。

さらには，「動員のサイクル」を複数ルートで考えるというのが，やり方として必要だろうと思います。ただし，これはボランティア・コーディネーターに相当に力量が要求されることになるんですが。すなわち，週1回で毎回来る人ばっかりを揃えるのではなくて，週1回，月1回，年1回参加みたいな形のボランティアの人を多様なバリエーションでつのる。その回の活動内容に応じて，今回はこの人に声をかけるというようなスタイルが可能であれば，来る人が常時固定化していくという傾向がなくなるかもしれません。年に1回のボランティアなどは，七夕みたいなもんで，「織姫ボランティア」「彦星ボランティア」とネーミングしてもいいかもしれません。年1回，実は多くの人手が必要なときだけ，頼む人みたいのがあってもいい。毎週来れる人ばかり集めると，その施設の近くに住んでいる人でないといけないことになりますが，動員サイクルを複数化すれば，全体の参加者を増やすことができます。これは，回転率50%でやっていくためには大事なところかなと思っています。

資金源の開拓はややNPO的問題ということになりますが，ボランティア論一般でも考えられるのは，ボランティアの活動の中身のコンセプトがうまく表現できていることが重要でしょう。コンセプトが，わかりやすい比喩になっていたり（例：幸福のおすそわけ，コーヒー1杯分，ワクチン100本），親しみのある媒体が使えたり（例：ドラえモンのテレフォン募金）すれば，少し変わってくるのかなと思います。どうすればいいかと言われて，個別にはアイディアがないんですが，一般論的にはそういうことが考えられます。

3－2. ボランティア・NPOの働きの変化

ボランティア・NPOの働きということでは，都市部と町村部でちょっと違うと思います。都市部では，ひとつの団体が，地域全体へ総合的な目配りをするというよりは，分業体制でいろんなボランティア活動や組織があって，雨後の筍のように出てくるという方がよいでしょう。そこで，競争や切磋琢磨というのが出てくる。それには，活動の質ということだけでなく，組織イメージの競争であったりもする。組織が一旦できたところでは難しいかもしれませんが，集団自身が結果を見据え撤退する勇気というのを持つということも重要だと思います。集団は栄枯盛衰するものということも考えておいた方がよいかもしれません。その意味では，数年で活動体のエネルギーも循環するのが一般的ですから，目的型プロジェクトのような形で数年ごとに変化をもたせていくことも組織としては重要でしょう。もっとも，他人の生活に大きくかかわる仕事では，撤退するのも容易ではないわけなのですが。

3－3.「地域」のもつ意味－選択するものか，作り上げるものか？

政治学の領域には，「足による投票」という言葉があります。これは何かというと，自分たちが適切なサービスをしてくれる行政，あるいは団体のある地域へ居住地を移してしまうという選択肢が住民にあるという意味です。ここはとってもいい地域だから，人が集まってくるという現象がある。しかし，日本の場合，持ち家世帯が多いですので，居住地移動が起こりにくいので，住民が自分たちの街を作り上げていくという必要がある。都市部ですと，

若い人はまだ持ち家ではありませんから，若い夫婦がより有効な保育政策のあるところに，住居を移すような居住地移動は起きはじめているかと思います。保育以外の福祉サービスの領域ですと，むしろその街で作り上げていくという形が多いでしょう。

しかし，そうした場合にも，近隣・地域共同体がというよりは，ひと駅離れているが関心が同じ人同士が結びつく，そういう結びつきが大事になってきていると考えられます。「向こう三軒・両隣」に縛られるということが今の時代ありえないと思いますが，ひと駅離れたぐらいの選択された関係をうまく作れるのかどうか。密着した人間関係でないけど，一方で離れすぎない，そういうゆるやかな関係が，今のボランティア活動の作り方に求められているものだろうと思います。

じっさいには，地域共同体・親族共同体が衰退したにもかかわらず，我々はまだお互いに連帯をして，一緒に活動をしたいような部分が一部あったりする。だから，そういうことを求める部分と，一人になりたいし，携帯電話でつながる形のほうが楽だなということもある。私たちの気持ちの中につながりたいという思いと，一人でいたいという思いが交錯しているということがあると思います。

最後に，3×3の活動の場という話をします。

さきほど貨幣に関わって「あしなが育英会」の例をあげました。それから，これから後のお話では，地域での人と人の直接の関わりの中でのお手伝いやサービスの話が出てくると思います。その一方で，情報交流という形のボランティアもあります。

[表3]　ボランティア－3×3の活動の場

		[人]	[貨幣]	[情報]
ローカル	[地域]	地域V	共同募金	緊急通報/ケータイ
ナショナル	[国]	阪神・淡路大震災	あしなが/NTV	internet
グローバル	[世界]	青年海外協力隊	フォスタープラン	internet

現状で行われているボランティアの場というのは，表3にありますように，もう3×3の広がりがあると考えておいた方がよいのではないかと思います。つまり，レベルとして，地域レベル，国レベル，世界レベルの3つのレベルがあり，そこで動くものとして［人］，［貨幣］，［情報］の3つがある。このように幅広く考えて，その中で自分たちの活動の位置づけはどうなるのか，逆に言うとそれらの各種の手法を使ってみるというようなこともありうるのかなと思っています。

4. 最後に

最後に，学生さんなどにボランティアのお話をするときに使っているのですが，俳優の杉良太郎さんという方が，寄付を多くする方として海外では大変有名で，日本・ベトナム友好協会の会長をしていたりします。ベトナムで一番有名な日本人は，杉良太郎だといわれているということです。私も物見遊山でベトナムに行ったときに，現地の人から「杉良太郎の彼女がどうしたこうした」とかいうのを聞いて，びっくりしたのを覚えています。彼，杉良太郎が言った言葉だったと思いますが，もし違っていたらごめんなさい。その言葉とは，「時間がある人は労力を，時間がない人は寄付を，両方ない人は理解を」というものです。人にはそれぞれ事情があるにしても，それぞれなりのかかわり方があって，どういう形であれ，活動へ協力していく形はあるだろうというのが，この言葉に表れているかと思います。

ボランティア活動も細長く続けていくことに意味があると思っていますが，そのためには少しでも関心がある人を幅広くつなげていくということが，中核を支えていくために大事なのじゃないかと思っています。たいへん時間オーバーをして申し訳ありませんでしたが，私のお話は以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。